

公立小学校におけるリタラシー指導 —音韻認識能力の発達との関連から—

アレン玉井光江 (青山学院大学)

キーワード：音韻認識能力，フォニックス，小学校英語

公立小学校における外国語科導入に関する現状

新学習指導要領のもと 2020 年度より公立小学校での外国語教育が改善そして充実されるが、その方向性は次のように示されている。

- ① 現在高学年に実施されている「聞く」「話す」を中心とした「外国語活動」を、中学年から導入し、年間 35 単位時間程度の時数を実施する。高学年の教科型の学習に連携していくことが重要。
- ② 発達段階に応じて高学年からは「読むこと」「書くこと」を導入し、全ての領域をバランスよく育む教科型の外国語教育を実施する。年間 70 単位時間程度の時数を実施。

さらに文部科学省は中学年で外国語活動の導入や高学年での教科化に対応した新教材を開発し、今年度が始まる前にそれに伴う映像教材も含め全国の小学校に配布した。高学年の指導にあたっては新たにええられたリタラシー関連の領域の指導が大きな課題となっている。『外国語活動・外国語研修ガイドブック』によると「外国語活動とは異なり、外国語科では“文字が持っている音”まで加えて指導する」となっており、今後は公立小学校でもフォニックスを通して文字と音との関連を意識的に教えていくことになる。

研究目的と方法

小学生を対象とした効果的なリタラシープログラムの開発が喫緊の課題であるが、本研究においては発表者が過去 12 年にわたり開発してきた公立小学校でのリタラシープログラム、中でも音韻認識能力とアルファベット知識を高める活動の有効性について報告する。

研究参加者 東京都内の公立小学校に通う 5 年生の児童 235 名。彼らは週 1 回、2 年間特別なリタラシー指導を受けた。といっても年 30 回程度の回数、さらに 1 回の授業ではリタラシー指導は 10 分程度である。したがって 2 年間でも 10 時間程

度の授業時間にしかない。参加者の音韻認識能力は 5 年生の最初と 6 年生の最初、そしてフォニックスに関する知識は 6 年生の後半に測定された。当該プログラムの特徴は以下の 5 つである。

1. 学級担任と専科教員との Co-Teaching
2. フレームワークとルーティン活動
3. 高学年生には徹底したリタラシー指導
4. 意味のある文脈はストーリーから
5. 英語で学校生活のことまたは他教科関連の事柄を学ぶ

結果と考察

授業ではアルファベットの文字と音との関連 (alphabetical principle) を獲得できるように指導したが、測定結果をステップワイズ法の回帰分析を使用して検証した。

Table 1 音韻認識能力とフォニックス

	回帰係数 (95%CI)	標準化係数	P 値
onset/rime (1)	.41 (.19 to .63)	.25	.00
body/coda (2)	.22 (.01 to .43)	.15	.04
onset/rime (2)	.64 (.33 to .96)	.32	.00

分析の結果、内部音節構造を body/coda 単位 (頭子音と母音を分けない) ではなく、onset/rime 単位 (頭子音と母音を分ける) で英単語を分節する力がフォニックスの力を予測していた。英語圏の研究においても、ライム認識能力とリーディング能力の発達に関連性があることを指摘する研究が多い (Bryant の一連の研究)。同じ現象が日本人の学習者にも見られたのは興味深い。

引用文献

- Bradley, L., & Bryant, P. E. (1983).
Categorising sounds and learning to read -
A causal connection. *Nature*, 301, 419-521